



営農情報

「あまおう」12月の管理

第54号 平成28年12月 7日

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

1 生育状況

10月～11月上中旬の高温や多雨による根腐れ等の発生により、やや小玉傾向で出荷が始まりました。

また、今年は頂果の奇形果や不受精花（黒変花）などの障害果が多く見られましたが、これは長雨によりビニール被覆が遅れたことや定植後～開花期の高夜温で、体内のホルモンバランスがくずれたことにより、花器の形成に悪影響を及ぼしたものと考えられます。

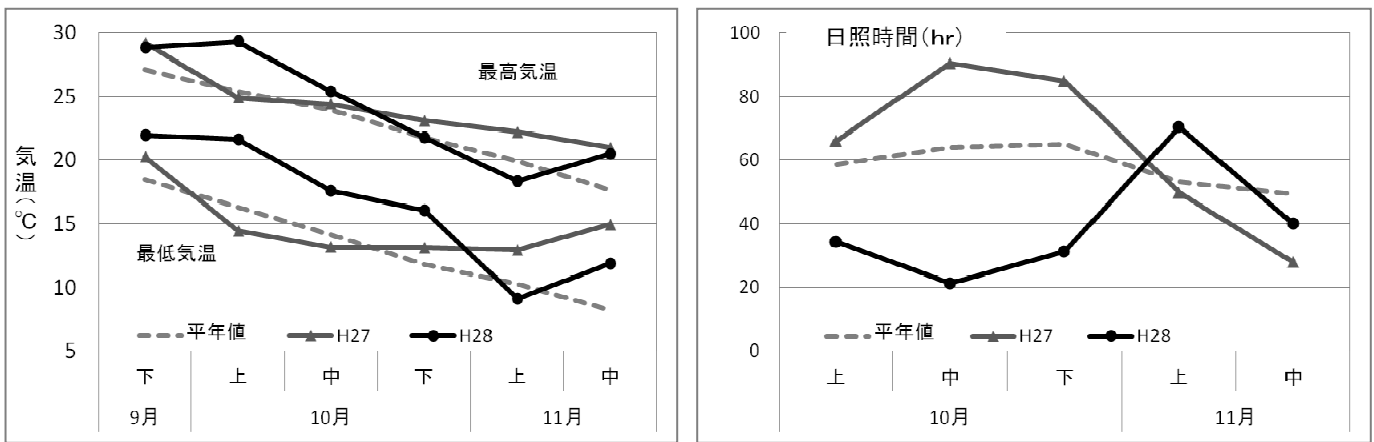


図1 気象の経過 (アメダス久留米より)

2 気象予報と今後の見通し

(1) 気象予報

福岡管区气象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

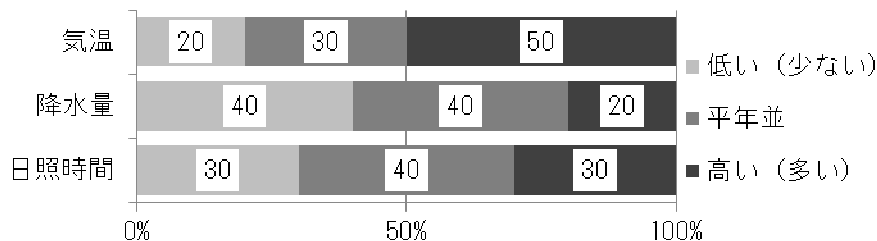


図2 1か月予報 (九州北部地方 予報期間：11月26日～12月25日 発表日11月24日)

(2) 今後の見通し

12月は気温が高く、降水量が平年並みから少ないと予想されています。このような環境下ではハダニ類が発生しやすいので、注意が必要です。

3 今後の管理

(1) 温度管理

表1 温度管理の目安

生育ステージ	昼間	夜間	備考
1 番果房収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの温度管理 12月中旬以降はやや高めに変更
1 番果房収穫終了後 2 番果房出蕾～肥大期	24～28℃	5～7℃	2 番果房の生育促進と、3 番果の早期出蕾 を目的として高めの管理

※ 寒波が予想される場合はあらかじめ高めの温度設定にしておく

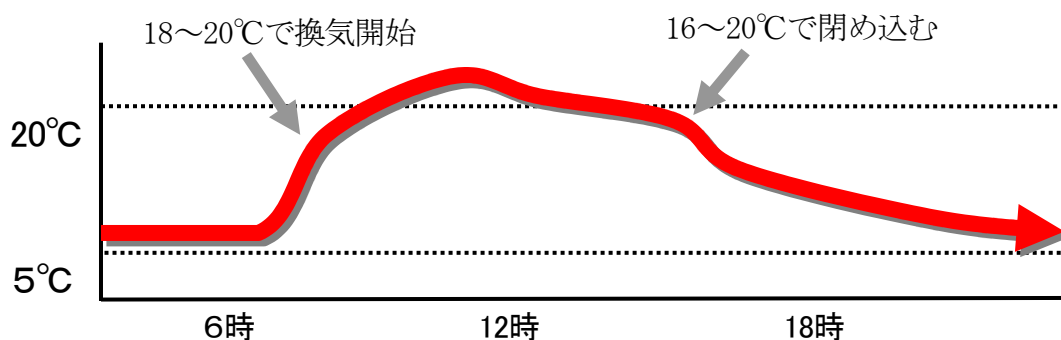


図3 一日の温度管理模式図

(2) 電照管理

心葉の展開位置を確認して、電照時間を調節する

- 電照の効果は1週間～10日後に現れるため、わい化してから電照時間を延長しても手遅れとなる。心葉の展開位置が、外葉より低くなり始めたら、電照時間を延長する。
- 電照時間は、2時間～6時間の範囲で調節する。
- 夜温が高いと、電照効果は高くなる。
- 厳寒期は立ち上がりすぎているようでも、電照を完全に切らないようにする。

表2 電照時間の調整の目安となる葉柄の長さ

電照時間	時間を延ばす	現状維持	時間を短くする
心葉の葉柄長	9cm以下	9～11cm	11cm以上

<3、4番花芽分化時期>

- 【早期作型】 3 番果房：11月下旬～12月上旬 4 番果房：12月下旬～1月上旬
- 【普通作型】 3 番果房：12月上旬 4 番果房：1月中旬

(3) かん水

かん水は少量多回数で行い、高温管理をする場合はかん水量を増やす。また、暖房機の稼働で、乾燥しやすくなるので注意する。

(4) 施肥

液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10aを2～3回に分けて施用する。

(裏面へつづく)

(5) 草勢維持

- ・ 2番果房出蕾期や、草勢が弱く株のわい化が予想される場合は、ジベレリンの散布を行う。
- ・ 成り疲れを軽減するために、発根促進剤（チャンス液、パフォームソイルなど）を定期的に流す。
- ・ 2番果房の出蕾状況を確認し、草勢や果房間葉数に応じて摘果を行う。

表3 1番果房の摘果後の着果数の目安

1～2果房間葉数	2～3枚	4～5枚	6～8枚	9枚以上
1番果房の着果数	5～6果	7～9果	10～12果	枝花のみ摘果

(6) 病害虫防除

○灰色かび病・菌核病

- ・ 湿度が高いと発生しやすいため、できるだけ換気を行う。
- ・ 曇雨天日などは、暖房機の送風や循環扇を活用し、結露を抑える。

○うどんこ病

- ・ 通常は湿度 80～100%で発生しやすいが、乾燥条件でも発生する。
- ・ 軟弱徒長した株に発生しやすいので、多発したほ場ではやや低目の温度管理を行う。

※ 灰色かび病、うどんこ病は、発病部位を速やかに取り除き、ハウス外に持ち出す。

また、定期的な薬剤散布(1週間間隔)により予防に努める。

○ハダニ類

- ・ 春先の急増を予防するため、ハダニ類の活動が衰える12月に防除を徹底する。
- ・ ハウス内の乾燥しやすい場所や出入口など、毎年発生しやすい場所を特に注意して観察する。
- ・ 寄生した葉の除去はすみやかに行い、ほ場内や周辺に放置しない。

特集「光合成促進装置を活用した炭酸ガス“日中施用”技術」

◎炭酸ガスを日中に施用すると、早朝のみの施用よりも効果が高い

＜ 厳寒期ハウス内では、日中に炭酸ガスが不足している ＞

厳寒期はハウス内温度維持のためハウスを閉め込むことによって、植物が光合成に使う炭酸ガス（CO₂）が不足して、光合成が十分にできないことがあります。

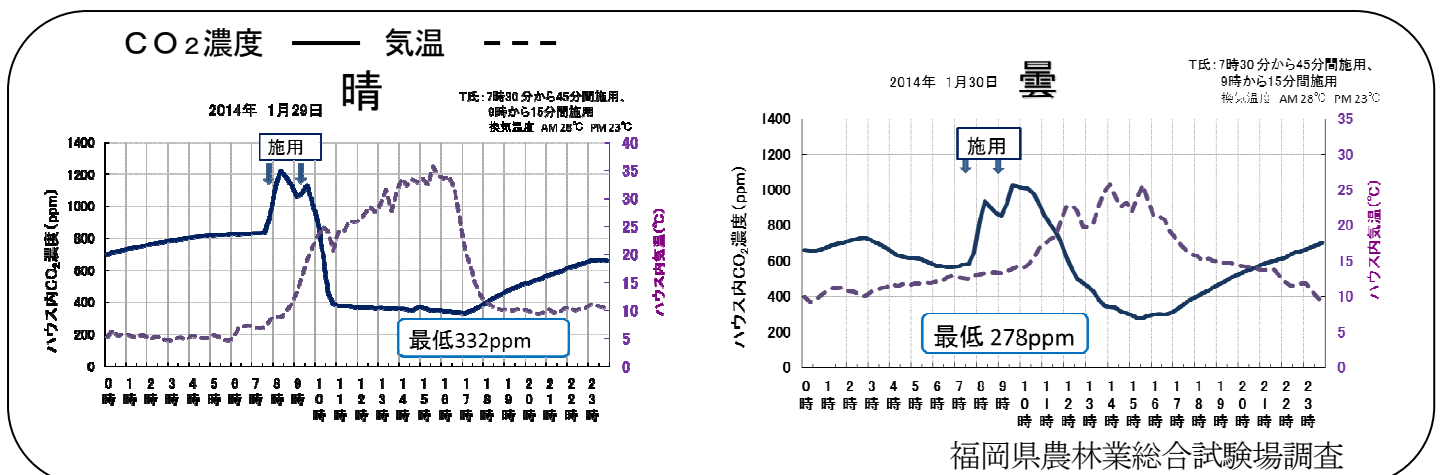


図4 炭酸ガスを早朝施用した場合の晴天日（左）と曇天日（左）のハウス内のCO₂濃度と気温の推移

“晴天日”では換気が行われるため、植物が光合成に使ったCO₂は外気より補給され、CO₂濃度は極端に低下しません。一方、“曇天日”では、ハウス内気温が上昇せず、換気が行われないため、CO₂は外気から補給されず、ハウス内のCO₂濃度が極端に低下します。

< 日中施用による増収効果 >

日中施用により、ハウス内のCO₂濃度を400ppm程度に維持(図5)することで、増収できます(図6)。

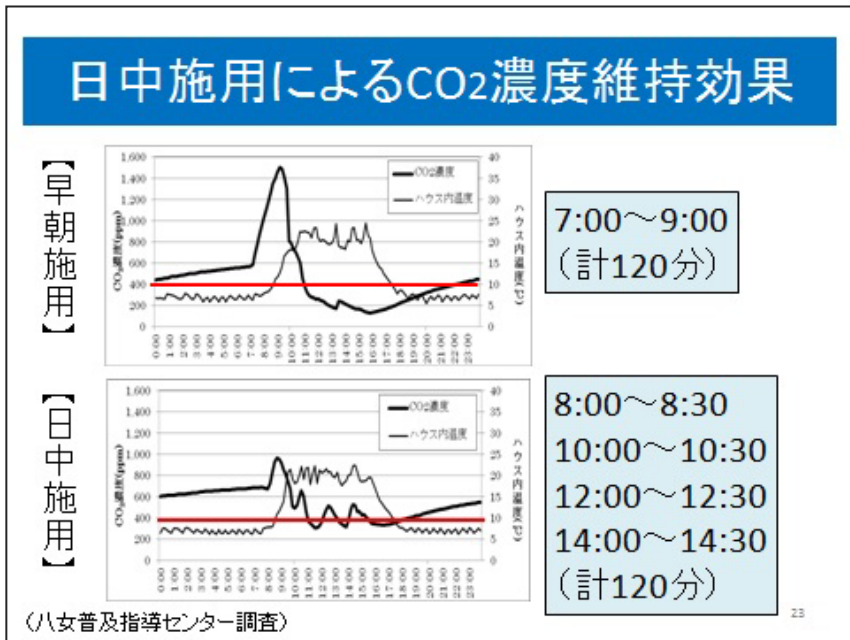


図5 日中施用によるCO₂濃度維持効果

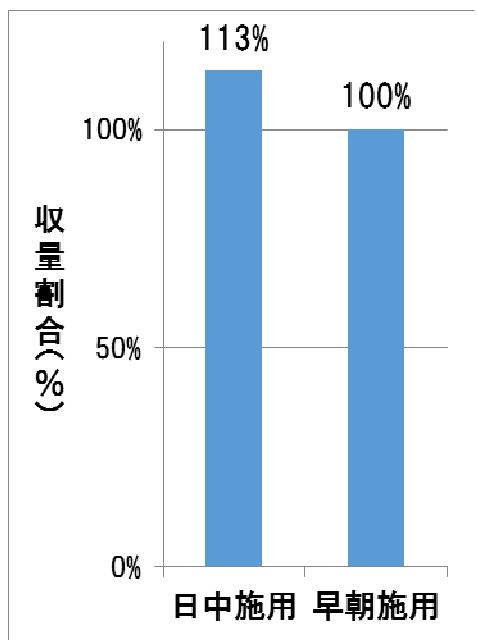


図6 日中施用による増収効果

< ハウス内のCO₂濃度を外気並に維持するためには? >

炭酸ガスを日中、定期的に施用することで、換気が行われない日中でも外気並のCO₂濃度を維持することができます。

表4 施用例

①	7:00~8:00、	9:00~9:15、	11:00~11:15、	13:00~13:15、	15:00~15:15
	(1時間)	(15分)	(15分)	(15分)	(15分)
②	8:00 から 15:00 まで、1時間おきに 15分				

光合成促進装置を持っている方は是非、早朝施用から日中施用への切り替えを行いましょう。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!